

海外派遣経験者が生きる国際教育

International Education activates human resource experienced in overseas

森本美鶴

MORIMOTO Mitsuru

徳島県板野郡北島町立北島南小学校

Kitajima Municipal Kitajima minami Elementary School

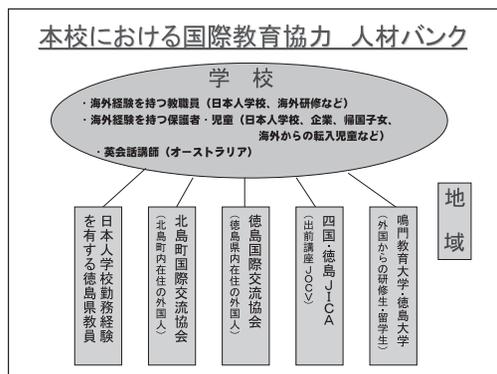
Abstract : The purpose of this paper is to suggest problems in applying of overseas experienced persons in international education of the school. About environmental problem or developing country understanding, we report that carried out the comprehensive studies of the 6th grade. In this study, my life experiences in Middle East, Japan Overseas Cooperation Volunteers, persons who experienced in an overseas business trip, and guest teachers of foreign residents who live near school, are cooperated with our teachings.

キーワード : 人材バンク, JICA, 青年海外協力隊, 共生, 人権尊重

I はじめに

国際理解の学習において、外国人また海外生活の経験を持つゲストティーチャーの活用は、子どもたちにとって心に残る人との出会いであり、実体験からの生の声を聞き、互いにふれあう活動は、様々な国への興味・関心を高め、生きた学習につながるものである。

円滑に学習を進めるには、様々な分野の人々、また組織との連携・協力が大切であり、常日頃より幅広いネットワークを持つことが不可欠である。下の図は本校の国際教育協力の人材バンクの組織図である。



II 6年生の総合的学習における人材活用

本校は、昔から校区が肥沃な農村地帯であったため、

総合的学習の時間を「土の子」学習と名付けている。昨年度より、ISO推進校の指定を受け、節電・節水・ごみの減化に全校あげて取り組んでおり、6年生の「土の子」学習でも、節水・節電の大切さを考える学習を取り入れた。1学期は「アライクムアッサラム（こんにちは）バハレーン」をテーマに、中東のバハレーンでの私自身の3年間の生活経験を糸口にして、国際理解学習をスタートさせた。1学期は、アラブの国から輸入している石油の大切さや、砂漠の国の厳しい水事情を知ることにより、エネルギー・水環境について日本の現状について比較・考察すると共に、くらしや文化の違いを理解する学習である。（学期活動計画参照）

1. 1学期の実践より

第6学年 土の子学習「ワールドスタディーズ」年間指導計画
— ISO推進事業校として環境問題に視点をおいて —

第1次 (20時間)	児童の活動	教師の支援・人材活用
環境に親しむ	1 オリエンテーション “世界を旅しよう”	JICAウォランゲージ
	2 “アッサラム アライクム バハレーン” (こんにちは バハレーン)	・写真集、世界地図
	アラビアの人々のくらしにふれよう	教師作成資料
	<ul style="list-style-type: none"> 気候・風土 くらし・産業 食生活 イスラム教とは 日本とのつながり 	・スライド、写真 ・ビデオテープ ・具体的提示物
	グループの調べ活動	原油カプセル
	課題① アラビアの石油と日本とのつながりを考えよう ② アラビア・アフリカの水事情を日本と比較しよう ③ イスラム教について話を聞こう ④ アラビア料理にチャレンジしよう	CDROM 「開けて見よう石油の活躍」 指導教師 (イギリス) JOCV(ザンビア) 日本人学校経験者 (インド日本人学校) 町内在住の外国人の方(マレーシア)

① オリエンテーションー世界を旅しよう

JICAから借りた様々な国の暮らしや風土を、写真を通して読み取るフォトランゲージを6年全員で体験し、世界の国々に目を向ける学習からスタートした。



② 「これは何だろう？」

バハレーンから持って帰ったサウジアラビアの原油カプセルを見せ、黒い原油が石油のもとであることを説明した。石油と日本、アラブの国と日本のつながりに関心が高まった。

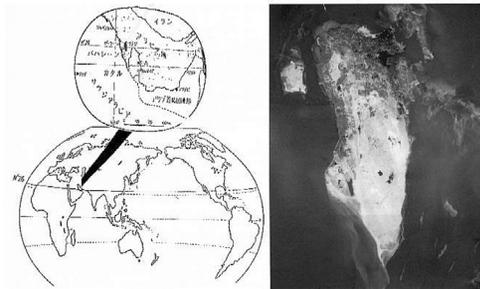


③ 石油と日本について考えよう

COROM (石油連盟)「調べてみよう石油の活躍」を使い、石油はどこで産出されるのか、どう使われているのか、日本と石油の関係を学習した。石油は限りある資源であり、特に資源のない日本では無駄なく大切に使うわなくてはいけないことが理解できた。



④ バハレーンってどんな国？



アラビア湾に木の葉のように浮かぶ小さな島国、1年の3分の2は40度近い暑さが続き、雨はまったく降らない。山も川もなく、雑草ひとつ生えない砂漠の国である。このような国では水は生きるためにはなくてはならない大切なものであることは、子どもたちも予想できた。そして、人々はどのようにして水を手に入れているのだろうかという疑問を持った。子どもたちの予想は

- ・水を外国から買っているのだろう
- ・地下水を掘っているのだろう
- ・海水を真水にしているのだろう

というものであった。

⑤ 調べ学習よりーアラブの国の水事情

インターネットや、バハレーン日本人学校の副読本などから、砂漠の国バハレーンでは、水をどう供給しているかをグループで調べ発表した。

バハレーンでは、豊富な石油の火力を使い、海水から真水を逆浸透圧淡水化させ水工場で製造していること、工場で生産された水はアクアクールという飲み水として販売されるが、家庭用の水は地下水が加えられ、塩水として供給されていること、そのためガソリンよりも真水の値段が高いことがわかったが、このような厳しい水事情は、子どもたちにとって驚きであった。首都のマナマ市内ではいたるところに、水を買う人が見かけられたことや、バハレーンではどのように節水を心がけていたかという自分自身の生活体験も語った。

子どもたちは、酷暑の砂漠の国では、水は生きていくためにはなくてはならない大切なものであることを知ることができた。





バハレーンの水の生産について発表するグループ



水工場で海水から真水をつくる現実—バハレーンの逆浸透圧淡水化工場—



大切に使用される水

家庭に配達される水



行き交う人に水を売る人 —首都マナマ市内で—

⑥ ザンビアの水事情に学ぶ —JICA出前講座—

水事情に恵まれないアフリカにも視点をあて、ザンビアの水事情について理数科教師として活動された青年海外協力隊の方の話聞いた。アフリカの農村部では、何キロもの遠い道のりを女性や子どもが、川や井戸からバケツで運ばなければならないこと、不衛生な水のため、病気になる子どもたちが多い厳しい現実を知ることができた。



「アフリカ(ザンビア)の水事情」—JOCV「JICA出前講座」



川まで水を汲みに行くアフリカの子どもたち

22/01/2005

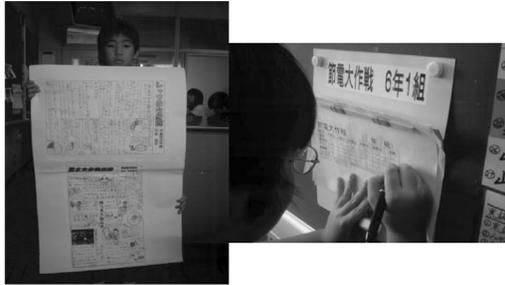
⑦ 節水・節電にチャレンジ

日本は、いつでもどこでもいくらでも水は手に入るように子どもたちは思っている。しかし、日本や世界の降水量調べを通して、日本は、実は人口1人当たりの水資源量は大変少なく、砂漠の国サウジアラビアよりも少ないという事実に子どもたちは大変驚いた。その理由を考える学習では、日本地図・国土の面積・人口統計の資料より、国土の狭さ、人口の多さ、傾斜の高い山の多い日本の地形が原因であることに気づくことができた。

アラブとアフリカの厳しい水環境は、日本も同様であること、石油の貴重さも学んだ事により、学校や家庭でも、節電・節水を実行しようとする意欲が高まり、6年生が中心となって、節水を呼びかける節水新聞を全校に発行したり、全学級で、一日に節電できた回数を記録したりするようになった。また、コップ1杯の歯みがきや、清掃バケツに目印をつけて水を入れるなどの節水が心がけた。



日本でも水の大切さに気づき節水を実行する子どもたち一歯みがき、清掃時一



全校に「節水新聞」を発行

毎日の節電回数の記録

⑧ 調べ学習より一イスラム教について調べよう

イスラム教の調べ学習では、グループでメッカ巡礼の旅を劇化したり、町内に住むイスラム教徒のマレーシアのGTを招き、5行と呼ばれるイスラム教徒の決まりや、日本の生活で困ること、理解してほしいことなどについて話を聞いたりする活動を行った。

また、サウジアラビアの聖地メッカのある、ジェッタ日本人学校で勤務された先生にもGTとして、イスラムの国での生活体験や、メッカ巡礼時の様子について話をいただいた。



イスラム教について調べよう一メッカ巡礼の劇をするグループ



「イスラム教とわたし」一町内在住のマレーシアのGTのお話一



「イスラム教とムスリムのくらしについて」一ジェッタ日本人学校に勤務したGTのお話一

⑨ アラビックレストランを開こう

1学期最後の学習では、みんなでアラビア料理を作り、アラビックレストランを開いた。スパイスの効いた料理は、暑さの厳しい国で生きていく大切な味覚であることを、自分の舌を通して理解できた。



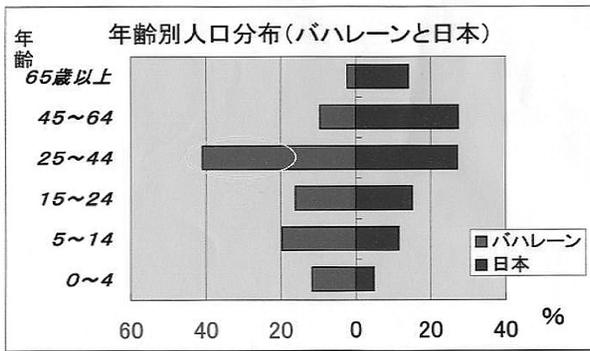
アラビア料理に挑戦しよう一オウラのカレー、タッブーラ、デザートを味わう一

2. 2学期の実践より

児童の活動		教師の支援/人材活用
環境から学ぶ	第2次 (20時間) “国際的な日本をめぐって” 外国人の人々と共に生きていくにはどうすればいいだろう → どの国(国)に住んでいい国の人	教師資料 ・スライド ・インタビュービデオ ・統計グラフ 指導教師(リレーション)
	どんな国から 何のために? どんな仕事? どんな願いを?	資料 ・徳島、日本在住外国人の国籍人数 ・在住目的別人数 ・北島町内在住の外国人の方(中国、マレーシア)
	日本の現実はどうだろう どんな国の人たちが? どんな目的で? 日本で何を感ず?	鳴門教育大学(ユニエ、ガーナ) アスカコンサルタント (ICAI4国、徳島青年海外協力協会主催)
	グループ調べ活動 課題①北島町や徳島県に住む外国人の人たちにインタビューしよう ②共に生きていく日本にするにはどうすればいいだろう	

2学期は、国際的な日本をめぐって、外国の人々とどう共生してゆけばいいだろうというテーマで学習を展開した。この学習の導入にも、バハレーンでの経験を生かし、アラブの国で働いている発展途上国の人々の現実からスタートした。そして、日本もまた、発展途上国の人たちがたくさん住んでいる国であることに気づかせ、これからどう共生していくべきかを考え合う学習である。

① グラフから見えてくるもの



バハレーンの年代別人口分布図を提示すると、働き盛りの20代から40代が圧倒的に多いことが読み取れた。なぜなのかを考えさせると、よその国から働きにきている人が多いのではないかという意見が出た。

バハレーンをはじめアラブの国では、厳しい暑さに耐え、3万円前後の給料の半分以上を家族に送金している発展途上国の人たちが、バハレーンの人々の暮らしを支え、また、バハレーンの人々もそれを受け入れ、互いに認め合い共存して生活していることを話した。

また、バハレーンで出会ったインド・パキスタン・ネパール・タイなど、様々な国から働きにきている人々をスライドで紹介した。国を愛する心、家族を思う心、弱い立場の者同士助け合って生きていく発展途上国の人たちのすばらしさと共に、異文化・言葉の壁を越え、互いの心と心を結ぶもの、それは人権尊重の精神であることを子どもたちに語った。

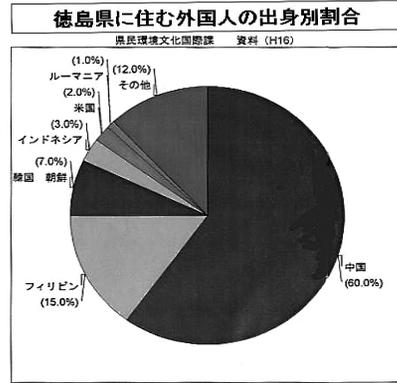


バハレーンの暮らしを支える発展途上国の人々との出会い —担任の話—

② 日本に住む外国人について調べよう

下記のグラフは、アラブの国の暮らしを支える発展途上国の人々の現実から、わたしたちの日本、そして徳島県はどうなんだろうという問題意識を持ち、徳島県に在住する外国人についてグループで調べ、作成したものである。

徳島県では、中国の人々が60パーセントを占め、1番多く在住していることが読み取れた。



③ 中国のGTを招いて

町内に住む中国からのGTを招き、中国についての話を聞いた。

中国のGTからは、世界一の人口と、たくさんの民族と言語、一人っ子政策、子どもの学校生活などを、子どもたちは興味を持って聞いた。

「わたしの国 中国」—中国のGTのお話—



④ アフリカのGTを招いて

鳴門教育大学の研究生であるケニアとガーナのGTを招き、「ジャンボ アフリカ」というテーマで交流学習を行った。

「チェチェコリ」というダンスや、アフリカについてのフォトランゲージを一緒に楽しんだ。ケニアの女性の衣装「カンガ」の着方も教えていただいた。



「ジャンボ アフリカ」— 鳴門教育大学研究生(ガーナ、ケニア)のGTを招いて



⑤ アフリカンコンサートの開催

JICA四国と徳島青年海外協力協会主催で、本校においてB、Bモフランさんのアフリカンコンサートが開かれた。保護者にも呼びかけ、親子で100名ほどの参加者があり、アフリカのすばらしい太鼓のリズムに、お年よりから小さな子どもたちまで、参加者全員が魅了されたひとときとなった。



このようなGTとの交流や、コンサートを通し、子どもたちは、国際化の進む日本において、互いの文化や考え方を理解し、同じ地球村の仲間同士として、お互いを理解し、共に認め合って生きていく大切さを学ぶことができた。

3. 3学期の実践より

3学期は、「子どもたちのSOS」というテーマで、世界の様々な子どもたちの問題を知り、自分たちに何が

できるかを考え合う学習を展開した。

	児童の活動	教師の支援・人材活用
環境と共に生きる	第3次 (20時間) “ワールド オブ ナウ -世界の子どものSOS-” 世界の子どものいろいろな問題点を知ろう 飢え 貧困 戦争 地雷 モイズ・感染症 グループによる調べ活動 課題① 日本に住むわたしたちにできることは何だろう ② 未来へのメッセージを絵や立体、文に表そう	資料 ・写真1はたらく子どもたち ・本「アジアの子どもたちまで」 ・詩「世界かもし100人の村だったら」 ・ビデオテープ ・JICA「学校に行きたい」 ・ユニセフ教材資料 ・地雷模型、学習キット 指導教師(タンザニア) 学校長(チハール) JVOVC出前講座 (セネガル)

① アフリカの子どもたちに出会って

平成15年度、JICAの発展途上国への支援活動を見聞するJICA教員海外研修旅行で、アフリカのタンザニアを2週間訪問する機会を得た。「教育は人生を開く鍵」を合言葉に、劣悪な教育環境の中でも、学ぶことの喜びに目を輝かせているタンザニアの子どもたちに心うたれた。アフリカのマイナス面ばかりでなく、アフリカのすばらしさを子どもたちに伝えたいと考えた。



② 「アフリカンマスク マイマスク」

タンザニアには、ティンガティンガアートというペンキ画や、マコンデ村の木彫りマスクなどすばらしい芸術がある。タンザニアの木彫りのマスクを紹介したところ、子どもたちも刺激を受け、自分たちも「わたしのマスク」を作りたいという意欲が高まった。



ボール紙で原型を作り、水性ペンキで白く塗ったあ



マスク作りに挑戦 - 形作りと着色 -

と、模様を考え着色させた。身近な材料を生かしてかざりをつけ完成である。

アフリカの音楽に合わせて、踊りながら作品の発表会を開いた。また、その後全員のマスクを集め、トーテムポールを完成させた。アフリカのびやかで自由な造形を楽しむと共に、ひとりひとりの個性や良さを発見し、みんなで作る楽しさを味わうことができた。



③ セネガルの子どもたち - JICA出前講座 -

セネガルの小学校で、環境教育に携わっていた青年海外協力隊の方の、「JICA出前講座」をお願いした。セネガルの子どもたちの学校生活をテーマに、ウォルフ語で数字を教えたり、民族衣装の実物や、暮らしを写した写真を提示し、日本との違いを考えさせるなど、子どもたちが興味を持ち、楽しく参加体験できる授業の工夫が見られた。

すべての子どもたちが就学できているわけではない現状や、アルコールランプの下で、将来への希望を持ち、勉強に励むセネガルの子どもたちの話を通して、子どもたちはあらためて学習することの意味や、自分たちの恵



アフリカ(セネガル)の子どもたちのくらしについて-JICA出前講座

まれた環境について、深く考えることのできた貴重なひとときとなった。

④ カンボジアの子どもたちと地雷の恐怖

徳島県国際交流協会の在県外国人等派遣事業の講師派遣制度により、地雷の恐怖についてカンボジアの留学生の方から、話を聞く機会に恵まれた。

カンボジアでは、長い間続いた内戦のため、1個がわずか数百円という値段で作られた地雷が、数え切れないほど地面に埋められ、子どもたちをはじめたくさんの人々が、手足や命を奪われていること、たった1個の地雷を取り除くために、大変な時間と労力、お金がかかることを話していただいた。地雷の模型を使っての実演に、子どもたちに大きな衝撃を受けた。また、内戦時の家族や自分自身の命を失うかもしれないという恐怖は、今も忘れられないという話に、平和な日本に生きている幸せをあらためて痛感させられた。



子どもたちのsos-命をおびやかす地雷の恐怖(ユニセフの地雷模型にふれて)

子どもたちが、一番犠牲になる地雷の怖さを知ることにより、子どもの命や人権が守られる世界にしなくてはならないことをみんなで痛感すると共に、世界の様々な子どもたちの問題に目を向けることの大切さをみんなで学ぶことができた。

⑤ 卒業制作 「ハロー地球村」

この1年間の国際理解学習「ワールド スタディーズ」を通し、子どもたちはこれからの未来が、ひとりひとりの命や願いが大切にされ、ともに生きていく明るい世界でありたいという未来への展望を、卒業文集や、卒業制作に表現した。「旅立ち―ハロー地球村―」をテーマに、6年生全員で国境というものがない、平和で明るい世界を、自由に気球で旅をしている様子を、紙粘土や、ベニヤ板で表現した。

この、共同作品は、卒業式の会場に掲示され、明るい未来への思いを胸に、子どもたちは小学校を巣立って行った。

「ハロー地球村」(図工科) ―グループで気球をつくる―



「旅立ち ハロー地球村」 ―卒業式の会場を共同作品でかざって―



これまでのたくさんのGTの協力を得た国際理解学習が、これから成長していく子どもたちが、広い視野を持ち、将来出会うであろう様々な国の人々と、互いを理解し認め合いながら、共生し合う態度・実践力に生かされることを心より願っている。

Ⅲ 今後の課題

外国人や海外派遣経験者をGTとして学校教育の場に生かし、国際教育をより推進していくためには、学校・GT・地域における各組織の連携をより密にし、それぞれの立場での課題への取り組みが一層望まれる。

学校教育における国際理解教担当者として、校内での国際教育の活性化をさらに図るとともに、子どもたちとともに、様々な国々のくらし・人々と出会い、世界への関心を持ち続けていきたい。

これからの課題

学校

- ① 校内における国際教育への関心の高揚と、校内研修の充実
- ② 教師の海外経験が評価され、積極的に学校現場で生かされる体制づくり
- ③ 県内・地域の大学、JICA、国際交流協会等との協力・連携と、積極的な人材活用の継続

海外体験を持つGT

- ① 学校現場のニーズに応える、海外経験を基にした魅力ある教材の工夫
 - ・児童の主体的な参加や、体験活動を取り入れて
(聞く活動から、共に参加し、五感で感じ、考える活動へ)

JICA・国際交流協会

- ① 県内・町内の国際教育人材リストの作成とその普及
(この学習にはこのGTが...)